

「バカの壁」を読んで

高杉 大地

なぜ私たちは普段の生活の中で、話が通じないことがあるのか。その理由は、相手との間に筆者の言う「バカの壁」が立ちほだかっているからだろう。「バカの壁」というのは、誰にでも存在していて自分が知りたくないこと、興味のないことは、自主的に情報を遮断する壁のことだ。今まで、私自身何度もこの壁のせいで、相手とうまく意思疎通ができなかったという経験がある。この本に出会い、なぜ話が通じないのか、どうすれば話をうまく伝えられるかということをも自分なりに考えることができた。ここで、まず筆者の主張を紹介する。

人々は自分の考えにこだわり、相手の考えを耳に入れない。だから、全体の状況を考えて、多角的な視点から適切な判断を下せない。自分の嫌なこと、知りたくないこと、興味のないことに対して、「バカの壁」を作って、情報を無視する。だから、いくら話したところで話が通じないのは当然である。「話せばわかる。」「一生懸命誠意を尽くして話せば通じるはずだ、わかってもらえる。」というのは机上の空論に過ぎない。「バカの壁」が個人間のコミュニ

ニケーションだけにあるならば、「ああ、この人とは分かり合えないのか。」で済む話だ。しかし、この互いに話が通じない関係が現代の社会全体に蔓延することで戦争、テロ、民族間宗教紛争を引き起こしてしまっている。

また、人間は現実があやふやの状況の時、何か確かなものを求めようとする結果、唯一絶対の存在として、「神」を確かな「正解」として徹底的に追及するようになる。キリスト教やイスラム教をはじめとする様々な宗教がいい例だ。信者たちは、自分が信仰することに関しての入ってくる情報、信条が絶対的なものとなる。つまり、この世に唯一絶対の「正解」など存在しないにもかかわらず、人々は一元論に囚われ強固な壁の中に住むことになってしまふ。それは一見、楽なことだが自分と違う立場のことは完全に見えなくなってしまう、話は全く通じなくなってしまう。

以上が作者の主張である。そこから私は、相手とうまくコミュニケーションをとる方法は大きく分けて二つあるのではないかと感じた。まず一つ目に先入観をなくして相手を理解してあげること、つまり「バカの壁」を意識的に乗り越えることが大切だと思う。相手の話を頭から否定してしまつては、少しも壁を乗り越え

することはできない。自分の考えを意識しすぎて、相手の話を聞けるのがなおざりになってしまえば、相手と上手く意思疎通ができないのは言うまでもない。つまり、相手と会話するとき求められるのは、積極的に相手の話を聞こうとする姿勢だ。まずは相手の理解を徹底したうえで話をすることによって、よりよい会話ができるはずだ。

二つ目の方法として、物事、さらには世界を一元論的ではなく多元論的に見るのが重要だと思う。つまり、これもある意味「バカの壁」の超越を意味する。私たちは、唯一絶対の正解は一つだけ存在するのであって、○か×かのどちらかだけだということにこだわりすぎている。具体例としては、一部のイスラム過激派組織があげられる。彼らはイスラムの教えを厳格に守るイスラム原理主義に基づいて、悲惨なテロ行為を行っている。完全に堅い壁に囲まれていて、周りが見えていない状態だ。彼らにとって、イスラムの教えのみが「正解」なのであって、他の考えは全て「不正解」。だからあのような行為をおこなっているのだろうが、一元論的に囚われるのではなく、もっと様々な考えを受け入れて欲しいと思う。これは、私たちにもそのまま言えることだろう。自分

の考えが絶対で他人の意見は全て間違っているという自己中心的な考え方では、対立やトラブルが起きてしまう。そうではなく、一人一人が固定観念に囚われずに、他人の無数の考えも受け入れることで、うまく会話ができるはずだ。

現代はグローバルな時代と言われ、世界各地の様々な人と交流すること、いろいろな考え方に触れることができる。つまりこれは自分の発想を大きく広げることができるチャンスだということだ。このような絶好の機会の中で先入観や固定観念などを取払い、自らの前にそびえ立つ「バカの壁」を超越できたならば、様々な人との意思疎通はもちろんのこと、多種多様な考え方から良い刺激を受けることができ、自分を大きく成長させられるのではないか。「バカの壁」の向こう側には多くの知恵や楽しみ、そして無限の可能性が広がっている。これからは、壁の先にあるものを求めて常に自分の壁を乗り越えていきたい。